

課題テーマの部 優秀賞

高橋沙優里さん 文学部国際文化学科4年

課題テーマ : 『職業について』

『自分の仕事をつくる』西村佳哲著 筑摩書房

私という職業

「しごと」というたった3文字の概念には、無数の捉え方がある。日々こなさなければならないこと、自己実現の手段、お金を稼ぐために必要なこと…。ひょっとしたら、ある人にとっては辛くて苦しい“嫌なもの”として捉えられているかも知れない。今の時代、大学や大学院を卒業した後、就職活動を経て企業に勤めるというのが一般的な職業を得るルートだ。しかし、たった数ヶ月の就職活動で知るには、社会はあまりに広く、混沌とし過ぎている。人や場所の数だけ働き方が違っていることに、気づくことは中々難しい。

この本には、「働き方研究家」である著者がピックアップした12の仕事がインタビュー形式で紹介されている。それらは建築だったり、サーフボード作りだったり、パン作りだったり、プラモデルメーカーだったり。すぐには思いつかないような、分野も職種も全く異なる仕事の先には、息を吸うように自然に、気持ち良く仕事をしている働き手の姿がある。

例えば「ルヴァン」というパン屋さんを営む甲田氏は、インタビュー中で“届けたいのはパンではなく気持ち良さ”と答えている。パンであってパンではない、あたたかい感情。自分の仕事の先にあるものを考えられるからこそ、その仕事に誇りを持つことができるのだろう。驚かされるのが、インタビューが1995年～2000年にかけて行われたという事実だ。働き方改革が叫ばれ、ワークライフバランスや副業についての議論が多く交わされるようになった今、働き方を考える機会は以前よりも多くなったと思われる。この本は、いつの時代も自分らしく生活を営み、働いている人は確かに存在しているのだという、当たり前の事実を思い出させてくれる。

著者は、“この世界は一人一人の小さな「仕事」の累積なのだ”という。私たちはモノやサービスの向こう側にいる作り手と距離を取り過ぎて、つつい小さな仕事の数々を見落

としてしまいがちだ。そうなってしまったのは物質的な豊かさの表れでもあるが、モノだけでは満足出来ないのが人間という生き物である。自分が生きていて価値のある存在だと認めてもらうことを、仕事にも求めてしまう。それは恥ずかしいことでも、人と違うことでもなく、ごく自然な人間らしい感情なのだろう。

私の職業は今、一般的に言えば「学生」かも知れない。けれど、私はこれからも「学んで生きる」ことを辞めるつもりはない。職業や仕事の先にどんな未来を作りたいか、何を誰に届けたいのか。この本に出てくる働き手一人一人が、それらを考えるきっかけをくれる。私は私という職業を一生勤め上げなければならないからこそ、自分に正直に、仕事をつくって生きていきたいと思う。